

縮小写像の原理

基本形

$X \subseteq \mathbf{R}^n$ として関数 (写像) $F: X \rightarrow X$ を考える. X のノルムを $\|\cdot\|$ とする.

定義 1 (縮小写像): $F: X \rightarrow X$ が縮小写像 \iff ある μ ($0 \leq \mu < 1$) が存在して

$$\|F(x) - F(y)\| \leq \mu \|x - y\| \quad (x, y \in X). \quad (1)$$

・縮小写像は連続である (証明は容易).

定理 1 (縮小写像の原理): $X \subseteq \mathbf{R}^n$ が閉集合, $F: X \rightarrow X$ が縮小写像とする.

(i) F は X の中に唯一の不動点 ($\bar{x} = F(\bar{x})$ を満たす \bar{x}) をもつ.

(ii) 任意の $x \in X$ に対して, $\lim_{k \rightarrow \infty} F^k(x) = \bar{x}$.

ただし $F^k(x)$ は $F(F(F(F(\dots F(x)\dots)))$) のように k 回適用したもの.

証明: (1) $x_k = F^k(x)$ ($k = 1, 2, \dots$) と定義すると, $x_0 = x$ として,

$$\|x_k - x_{k+1}\| = \|F(x_{k-1}) - F(x_k)\| \leq \mu \|x_{k-1} - x_k\|.$$

したがって $\|x_k - x_{k+1}\| \leq \mu^k \|x_0 - x_1\|$ であり, $0 < k < l$ のとき,

$$\begin{aligned} \|x_k - x_l\| &\leq \|x_k - x_{k+1}\| + \|x_{k+1} - x_{k+2}\| + \dots + \|x_{l-1} - x_l\| \\ &\leq (\mu^k + \mu^{k+1} + \dots + \mu^{l-1}) \|x_0 - x_1\| = \frac{\mu^k - \mu^l}{1 - \mu} \|x_0 - x_1\|. \end{aligned}$$

最後の項は $k, l \rightarrow \infty$ で 0 に収束するから, 点列 $(x_k)_{k \in \mathbf{N}}$ は Cauchy 列.

(2) \mathbf{R}^n の完備性により, ある $\bar{x} \in \mathbf{R}^n$ が存在して $x_k \rightarrow \bar{x}$.

(3) (x_k) は X の点列で, X は閉集合だから, その極限 $\bar{x} \in X$.

(4) $x_{k+1} = F(x_k)$ において $k \rightarrow \infty$ として, F の連続性を使うと, $\bar{x} = F(\bar{x})$.

(5) \bar{y} も不動点とすると, $\|\bar{x} - \bar{y}\| = \|F(\bar{x}) - F(\bar{y})\| \leq \mu \|\bar{x} - \bar{y}\|$.

ここで $0 \leq \mu < 1$ だから, $\bar{x} = \bar{y}$.

(証終)

・縮小写像の原理は, 完備な距離空間 (X, d) と関数 $F: X \rightarrow X$ に一般化できる.

パラメータを含む場合への拡張

$X \subseteq \mathbf{R}^n$ (閉集合), $U \subseteq \mathbf{R}^m$ として関数 $F: X \times U \rightarrow X$ を考える.

縮小写像の条件 (1) を拡張した条件: ある μ ($0 \leq \mu < 1$) に対して

$$\|F(x, \alpha) - F(y, \alpha)\| \leq \mu \|x - y\| \quad (x, y \in X, \alpha \in U) \quad (2)$$

を考える. この条件が成り立つとき, 縮小写像の原理により, 各 $\alpha \in U$ に対して, $\bar{x}(\alpha) = F(\bar{x}(\alpha), \alpha)$ を満たす点 $\bar{x}(\alpha) \in X$ が一意に存在する.

定理 2: X は閉集合とし, (2) を仮定する.

(i) F が α に関して連続ならば, $\bar{x}(\alpha)$ は α の連続関数である.

(ii) F が (x, α) に関して連続微分可能 (C^1 級) ならば, $\bar{x}(\alpha)$ は α に関して C^1 級である.

証明 (i)

$$\begin{aligned}\|\bar{x}(\alpha) - \bar{x}(\beta)\| &= \|F(\bar{x}(\alpha), \alpha) - F(\bar{x}(\beta), \beta)\| \\ &\leq \|F(\bar{x}(\alpha), \alpha) - F(\bar{x}(\beta), \alpha)\| + \|F(\bar{x}(\beta), \alpha) - F(\bar{x}(\beta), \beta)\| \\ &\leq \mu\|\bar{x}(\alpha) - \bar{x}(\beta)\| + \|F(\bar{x}(\beta), \alpha) - F(\bar{x}(\beta), \beta)\|\end{aligned}$$

により,

$$\|\bar{x}(\alpha) - \bar{x}(\beta)\| \leq \frac{1}{1-\mu} \|F(\bar{x}(\beta), \alpha) - F(\bar{x}(\beta), \beta)\|.$$

ここで $\alpha \rightarrow \beta$ とすると, $\bar{x}(\cdot)$ が β で連続であることが導かれる.

(ii) $\alpha, \beta \in U$ として

$$A = \frac{\partial F}{\partial x}(\bar{x}(\beta), \beta), \quad B = \frac{\partial F}{\partial \alpha}(\bar{x}(\beta), \beta)$$

とおく (A は $n \times n$ 行列, B は $n \times m$ 行列). 不動点の定義と F の微分可能性により

$$\begin{aligned}\bar{x}(\alpha) - \bar{x}(\beta) &= F(\bar{x}(\alpha), \alpha) - F(\bar{x}(\beta), \beta) \\ &= A(\bar{x}(\alpha) - \bar{x}(\beta)) + B(\alpha - \beta) + o(\|\bar{x}(\alpha) - \bar{x}(\beta)\| + \|\alpha - \beta\|)\end{aligned}$$

である. 条件 (2) より $\|A\| \leq \mu < 1$ だから $I - A$ は正則である. したがって, 上式から

$$\bar{x}(\alpha) - \bar{x}(\beta) = (I - A)^{-1}B(\alpha - \beta) + o(\|\bar{x}(\alpha) - \bar{x}(\beta)\| + \|\alpha - \beta\|)$$

となり,

$$\bar{x}(\alpha) - \bar{x}(\beta) = (I - A)^{-1}B(\alpha - \beta) + o(\|\alpha - \beta\|)$$

である. ゆえに, $\bar{x}(\cdot)$ は微分可能であり,

$$\frac{d\bar{x}}{d\alpha}(\beta) = (I - A)^{-1}B$$

である. 変数を β から α に書き換えると

$$\frac{d\bar{x}}{d\alpha}(\alpha) = \left(I - \frac{\partial F}{\partial x}(\bar{x}(\alpha), \alpha) \right)^{-1} \frac{\partial F}{\partial \alpha}(\bar{x}(\alpha), \alpha)$$

となる. ここで F が C^1 級だから, $\frac{\partial F}{\partial x}, \frac{\partial F}{\partial \alpha}$ は連続であり, (i) により $\bar{x}(\alpha)$ も連続であるから, 上式の右辺は α に関する連続関数である. したがって, $\bar{x}(\alpha)$ は C^1 級である.

以上 (2012-01-10)